

東欧における幾何学的形態の家具 —チェコ・ポーランドのアール・デコ様式の家具—

野 崎 勉

家政学部生活科学科住居学専攻

(2010年9月24日受理)

The Geometric Form of Furniture in Eastern Europe —Art Deco Furniture in Poland and Czech Republic—

Department of Home and Life Sciences, Faculty of Home Economics,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

NOZAKI Tsutomu

(Received September 24, 2010)

I. はじめに

前稿に続き東欧の国々の家具について、20世紀ヨーロッパのアヴァンギャルド芸術運動の影響を受けたチェコやポーランド家具の歴史的展開について報告する¹⁾。

それらは、キュビズム、ロシア構成主義等の影響を受けた、フランスで1908年から1909年にかけて誕生したアール・デコ様式から由来するものであった。

このアール・デコ様式は、建築や室内装飾など、フランスからヨーロッパやアメリカに渡りニューヨーク摩天楼として知られている。

しかしながら、他の中欧や東欧に広がり、チェコやポーランドでキュビズムの影響を受けたアール・デコ様式が普及し、幾何学形態を有する建築、室内様式や家具等が流行した事実があまり知られていない。

1918年から1938年にかけて流行したこれら両国の室内様式と家具は、直線、斜線、円、円弧、三角形、立方体、角錐、流線形とジグ

ザク線、ジグザグ、階段状等の幾何学的形態の特徴を示し、その特徴は形態や構造の中に顕著に現れている。

このアール・デコ様式は、当時の産業発展に伴う新しい材料や曲木家具の出現と歩調を合わせ、クラフト工芸と産業を結びつけた新



写真-1 チェコのキュビズムを代表する建築
ネクラノヴァの集合住宅。プラハ。1913年-
1914年。ヨゼフ・ホホル作。建築ファサードと
室内の幾何学形態

しいデザインを模索している。

その成果が最も示されたのは、1925年にパリで開催された「装飾芸術・工業芸術国際博覧会」(アール・デコ展)であった。

その中で東欧の国々の共通点として、20世紀の現代生活と産業との関わりの中で、自国の伝統、フォーク芸術やその装飾芸術を基本とし、産業と融合しながら当時のキュビズムの影響の下にアール・デコ様式の確立を目指した。

昨年の卒業研究指導の反省点として、学生志向の中に家具単体へのデザインや制作に力点を置く傾向が見られ、室内と全体を通した家具デザインの指導が成功したとは言い難い。

もともと家具のデザインは、室内様式やインテリアとの全体調和や、その関係性の中から家具様式や機能と形態、寸法が決まり優れた家具が創造される。

この課題を考えていたところ、日本の大学院で研究していたフランス建築家、ル・コルビュジェのアール・デコ展におけるエスプリ・ヌーボー館の作品に着目し、その室内様式と家具の近代性に興味を持たれた²⁾。

この論文は、日本での研究に加え、当時のワルシャワ工科大学の研究とポーランド科学アカデミー芸術研究所やチェコの研究者の助言による研究成果である³⁾。

II. チェコのキュビズム建築と家具及びアール・デコ様式の家具

[II-1]. 初期アール・デコに向けたキュビズム

1911年にチェコを代表するキュビズム理論を展開するパヴェル・ヤナークが雑誌、「造形芸術集団」の機関誌に「多角柱と多角錐」の論文を発表し、チェコ建築界の指導的立場



写真-2 チェコの幾何学的形態のキュビズム家具

(左上写真) ヨゼフ・ゴチャール作, 1913年, (右上写真) パヴェル・ヤナーク作, 1911年-1912年, (下写真) ヴァツワフ・ロゼック作, 1923年



写真-3 幾何学的形態家具。ライティングデスク。チェコ
ヨゼフ・ゴチャール作。1913年

を果たした。

その下に、ヨゼフ・ホホルやパリの「装飾芸術・工業芸術国際博覧会」のチェコ・パビリオンの設計者、ヨゼフ・ゴチャール、さらにオタカル・ノヴォトニー、ヴラティスラフ・



写真-4 幾何学的形態のソファ。チェコ
ヨゼフ・ゴチャール作。1914年



写真-5 幾何学的形態の家具。椅子。チェコ
キュビズムの特徴をもつ。パヴェル・ヤナーク
作。1911年-1912年

ホフマンらが従い、彼らは建築や家具、ガラス、陶磁器までもデザインし、同時代のアヴァンギャルドの流れと歩調を合わせ、伝統との共存する形で新しい建築表現を試みた。

これは、ポーランドにおける1918年の第1次世界大戦後の独立に際する新しい芸術運動と共通するものであった。

キュビズム建築家達のヨゼフ・ゴチャール、パヴェル・ヤナーク、ヨゼフ・ホホル、オタ

カル・ノヴォトニー等は、オーストリアの分離派、ゼツェションで活躍したヨゼフ・ホフマンのウィーン工房に摸して、1912年に家具会社「プラハ美術工房」を設立した。

その上で彼の作品から多くの影響を受けた。

彼らは、アヴァンギャルドの芸術家であり、1910年-1914年に渡るチェコのキュビズム全盛期に活躍し、それらの初期作品に顕著な痕跡を残している。

彼らの初期作品には、単純化、純粋化、幾何学形態等が好んで使用された。特に、それらの形態には、鋭く曲がった線、三角形とプリズム（結晶体）に分割された形態などが見られる。

作品に使用された材料と技術への検討や配慮が十分に払われず、彫刻のように家具を扱い、家具に対する使用機能の対象としての意識が高くなく、装飾が施されていない点が指摘できる。

1914年には、モニュメンタル様式の軽快さが加わり、電撃的な曲線形態の鋭く曲がったものが、三角形の場所に円、円弧、輪が現れたと言える。この様式は、時とともに、民族的モチーフである円柱や円弧を多用したロンド・キュビズムの名称を獲得し、パヴェル・ヤナーク等の作品が代表した。

そして、1918年に民族様式として認識され、アール・デコ様式の初期段階を示した。

それらは、ヨゼフ・ゴチャール設計のライテングデスクと呼ばれる、クモの巣のように鋭く折れ曲がった細い脚、ジグザク線の背などの鋭角な線が強調されている。(写真-3、参照)

またソファは三つのジグザク線の幾何学形態を示す背もたれを有する。ソファを覆うファブリックは、フランチシェク・キセラの作であり、植物装飾の多様が見られる。(写

真-4)

この特徴は、地方伝統のフォーク芸術の応用であり、ポーランドなど東欧の共通する特徴として指摘されている。(写真-6)

一方、パヴェル・ヤナークの家具は、立体



写真-6 キュビズムの幾何学的家具の本棚。

チェコ

ヨゼフ・ゴチャール作。オーク材、黒色塗装、内部化粧張りマホガニー材、ガラス板。1913年

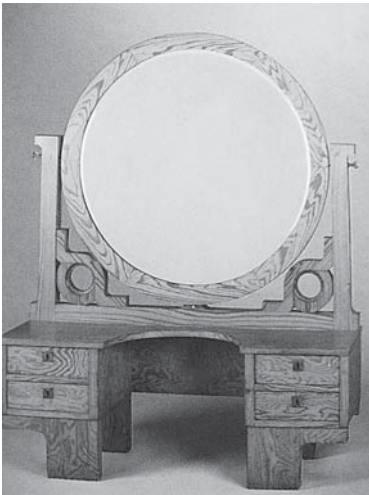


写真-7 チェコの代表的なアール・デコ様式の家具。化粧台。 Rond・キュビズムの円の使用。

ヨゼフ・ゴチャール作。1915年。松材。化粧張り木材の鏡の縁部分

感を強調する斜めに走る線、結晶形や鋭角の造形的な幾何学的モチーフ、角錐体やキューブ、アーチや円柱、円形を使用した Rond・キュビズムの特徴をもつアール・デコ様式の家具を設計した。

例として、1911年-1912年の椅子の作品が挙げられる。(写真-5参照)

この椅子は、斜めの線による逆3角形の背もたれを、さらにくり抜いて鋭い線を強調している。細い脚は少し曲げられ、座面には円形の窪みが施されている。

また、彼の次作品例として、化粧台が挙げられる。梨材で化粧張りが施され、カットガラスが鏡に使用されている。

[II-2]. チェコのアール・デコ様式の家具

チェコのアール・デコ様式を牽引したのは、キュビズムを建築や家具分野で推し進めた、パヴェル・ヤナークとヨゼフ・ゴチャールであった。

その中で、パヴェル・ヤナークは、オースリアのウイーン分離派で活躍したオットー・ワグナーの下で建築を学び、ウイーンのモダニズムにおける直線的な幾何学構図を取り入れた。さらに、彼独自の「プリズムとピラミッド」の論文の中で、斜線を水平や直角と同等に建築概念の中に位置づけ、形に動きをもたせる、ピラミッド原理における蘇生を暗示させる「第3の力」として、斜線を自然界の重力法則に代わるものとして好んで使用した。

また一方では、彼はフォーク芸術に目を向け、チェコの木造建築の装飾性から影響を受け、半円様式と呼ばれる Rond・キュビズムを確立し、新国家を象徴する建築や家具にてアール・デコ様式を採用した。

これらにおいて、パヴェル・ヤナークとヨゼフ・ゴチャールは、明るい色彩配列を用い

た重量感みなぎる作品を制作し、チェコを代表するモダンスタイルを生み出し、セミサークル・キュビズムまたはロンド・キュビズムと呼ばれた作品を残した。

それは、チェコ独特の色彩として、国を象徴する赤と白の色を多用し、建築、室内装飾は、チェコのフォーク芸術を基礎とした。

最も代表するアール・デコ様式の家具としてヨゼフ・ゴチャールの化粧台と書斎机などが挙げられる。(写真-7, 8参照)

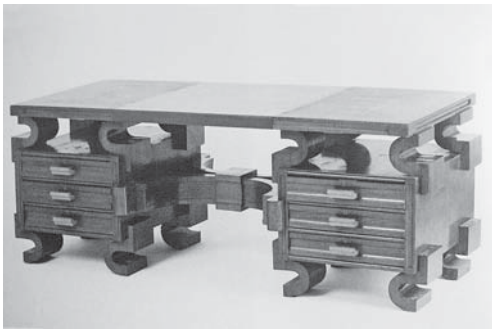


写真-8 チェコのアール・デコ様式の家具。チェコ書斎机。ゼフ・ゴチャール作。オーク材，皮革命1922年-1924年

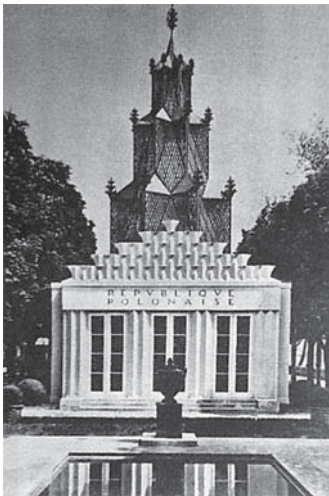


写真-9 「装飾芸術・工業芸術国際博覧会」パリ
ポーランド・パビリオン。
ユゼフ・チャイコフスキー作。1925年

それに加えて、1920年代と1930年代のヴァツワフ・ロジェックの1923年の事務机(写真-2, 下の写真を参照)や同年のレスト・テーブルが指摘される。

一方、フランチシェク・ノヴァック作品の1930年作のカード・テーブル、肘掛椅子などには、円弧、円、円柱などを多用したアール・デコ様式の明確な特徴が見られる。

Ⅲ. ポーランドのアール・デコ様式の幾何学的形態の家具

1925年のパリで開催された「装飾芸術・工業装飾国際博覧会」では、チェコのヨゼフ・ゴチャールが設計したチェコ・パビリオンとともに、ポーランド人の建築家、インテリアデザイナーのユゼフ・チャイコフスキーの設計によるポーランド・パビリオンが、当時のポーランドのアール・デコ様式の特徴を最もよく表したものであった。

それらのパビリオンは、地方伝統のフォーク芸術の装飾と、キュビズムの造形的な影響、フランスのアール・デコ様式の影響を受けた作品が展示された。(写真-9)

本項では、ポーランドの室内様式や室内装飾と密接な関係をもつ家具の独特な幾何学形態を有するアール・デコ様式について、形態、材料、色彩などについて論じる。

アール・デコ初期には、ウイーン分離派のゼツェション様式の影響を受け、古典主義、ビーダーマイヤー様式⁴⁾などを受け継いだ。さらにロシア構成主義やチェコのキュビズムの影響を受けながら、壁、床、織物等に幾何学的形態を示す室内様式と家具が誕生した点が指摘される。

具体的には、この幾何学的形態は、直線、円弧、円、円柱、三角形、六角形、八角形、立方体、角錐台、流線型、ジグザク線、ジッ

グラッド、階段状、逆ピラミッド型、原色や漆の使用等、フォークや大工技術の木彫りの幾何学的モチーフをもつアール・デコ様式が挙げられる。さらに、自然素材の木目使用や漆黒や合板の黒壇、曲木家具による曲線、円弧、曲面によるアール・デコ様式の家具が指摘される。

[Ⅲ-1]. アール・デコ様式の先駆者、ポーランドの応用芸術協会の幾何学形態家具

1901年に、ポーランド南部の都市、クラクフに民衆芸術、クラフトと産業の融合を図る目的をもった建築家、家具デザイナー、ク

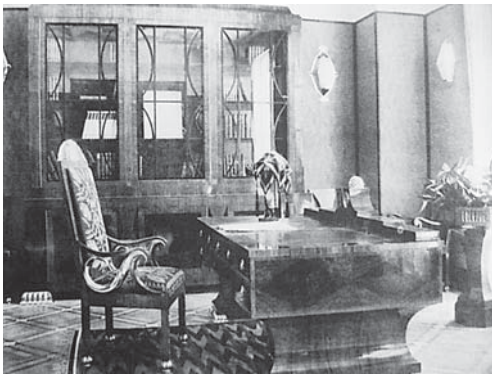
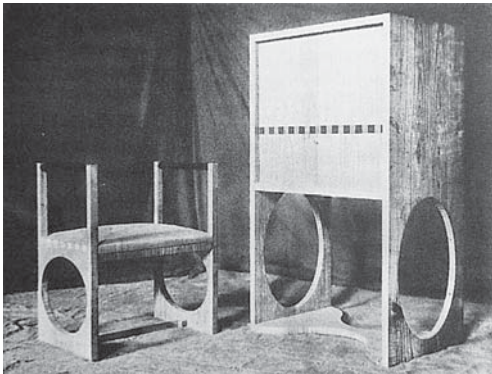


写真-10, 11 カロル・ティヒ作の室内と家具。
ウイーン工房とフォーク芸術の影響を受けた幾何学形態の寝室の椅子と収納棚の家具。1908年。ビーダーマイヤー様式を受けたサロンの家具。ソファとテーブルと椅子。1912年。ポーランド

ラフトマンらの芸術家が協同組合とクラクフ工房を設立した。

彼らは、1925年パリ開催の「装飾芸術・工業芸術国際博覧会」展示にてポーランド・バビリオンの作品出典を行った。

彼らの目的は、(1) ポーランドの新しい民族・国家様式の創造。それは、その土地固有の民衆芸術、フォーク芸術、職人仕事からの幾何学形態と幾何学的モチーフの装飾の借用。(2) クラフト(職人仕事)の芸術水準を高め、産業と芸術との融合を図る事であった。彼らは、イギリスのウイリアム・モリスのアーツ・アンド・クラフト運動の芸術運動から多大に影響を受け、大量生産による製品・作品の質の低下を防ぎ、産業と融和された質の高い手工芸を求めた。

その最も代表的な作家の一人にカロル・ティヒが挙げられる。(写真-10, 参照)(写真-11, 参照)彼の作品は、オースリアのウイーン分離派のゼツェッション様式作家のヨゼフ・ホフマンのウイーン工房の所謂Sitzmaschine(座る機械)と呼ばれる調整付き背もたれ肘掛椅子(1905年)作品に影響を受けた。

カロル・ティヒの寝室の椅子と収納棚の家具(写真-10, 参照)は、水平線と垂直線の釣り合いの法則で構成され、円形形態に透かし彫りの装飾と黒白の小さい三角形のはめ込み細工、象牙がみられる。この作品は、前述のヨゼフ・ホマンの作品と類似し、首尾一貫して機能的な構造で支持され、幾何学的な基本形の姿に正方形、円、垂直、直角の形態、三角形モチーフ、正方形モチーフなど、シンメトリー、幾何学と単純化の特徴は、アール・デコ初期におけるウイーン作家達の作品に近似している。

1912年にクラクフ都市公園内の「建築とインテリア」展が開催され、彼の独立住宅内

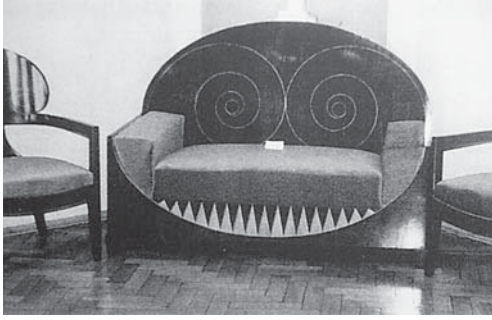


写真-12 カロル・ティヒ作。ビーダーマイヤー様式の影響を受けたサロンのソファ。
1912年。「建築とインテリア」展のサロン内展示家具。ポーランド

におけるサロンの家具が、古典主義やビーダーマイヤー様式の楕円形で構成された椅子とソファに興味注がれる⁴⁾。

(写真-12参照) このサロンは、室内様式と家具がビーダーマイヤー様式の特徴を有し、アル・デコ様式の前兆が見られる。

[Ⅲ-2]. アル・デコ様式の前駆者、スタニスワフ・ビスピアンスキー

アル・ヌーボーの作家として名を馳せたスタニスワフ・ビスピアンスキーは、1904年に「国家・民族のインテリアと家具」と題し、クラクフの芸術展示会に作品を紹介した。それは、フォーク装飾の山岳芸術から引用されたものであった。彼の山岳フォーク芸術の関心は、1905年にタデウシ・ゾフィア・ジェロムスキー夫婦の住宅の食堂に具現化されている。食器棚の扉と椅子の背もたれに様式化された星型のポーランド南部地域のポドハレ地方のオーナメントが配され、幾何学的形態、控えめな装飾、材料の美的応用が見られる。特に、家具の構成全体に幾何学的形態が強調されている。(写真-13)

次に、アル・デコ様式の前駆的な作品として、1904年のクラクフの医者協会建物で



写真-13 スタニスワフ・ビスピアンスキーのゾフィア・タデウシ・ジェロムスキー夫婦の住宅の食堂。
1904年。ポーランド。ウィーンの幾何学の初期アル・デコ様式の影響

あり、会議ホール内部における肘掛椅子の幾何学的形態が特筆される。

そのインテリアと家具は、ウィーンの初期アル・デコ様式に影響を受けており、同時にポーランドのアル・デコ様式の前兆の作品と指摘されている。

Ⅳ. パリ「装飾芸術・工業芸術国際博覧会」 ポーランド・パビリオンのアル・デコ様式家具

ポーランドの展示は、パリのセーヌ川の北と南の両方の敷地に分散され展示された。

まず、主なポーランド・パビリオンは、ユニークな様式をもち、キュビズムの幾何学形態と民衆フォーク芸術の融合されたアル・デコ様式であった。(写真-9)

次に傷病兵と称されたパビリオンであり、民衆芸術、フォーク等の職人技術が展示された。

最後に、幅広いポーランド応用芸術が展示された各部屋を有するグラン・パレスのパビリオンである。

[IV-1]. ポーランド・パビリオンの名誉サロンの家具。カロール・ストリィエンスキーの作品

この名誉サロンの家具として、木造ベンチとテーブルであり、モニュメント性をもつ深い木彫りの表現は、アール・デコ先駆者のスタニスワフ・ビスピアンスキのクラブ娯楽室のベンチエレメントと類似し、脚における手編みレース形態のキュビズムの特徴が指摘されている。(写真-14, 参照)

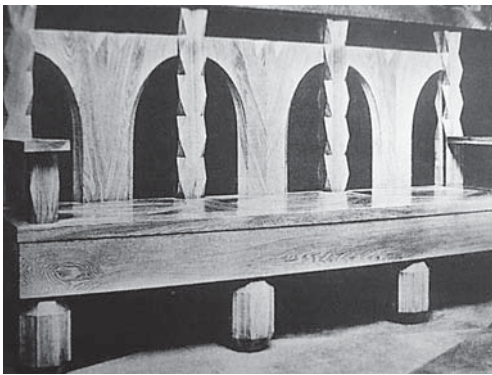


写真-14 カロール・ストリィエンスキー作の木造ベンチ

ポーランド・パビリオン名誉サロン内。パリ。キュビズムの影響と木彫りが特徴。1925年

同様にポーランド南部の山岳地域のポドハレ地方の鋭いナイフで刻まれたモールディングがアール・デコ様式の特徴を示している。

そのテーブルとベンチは、特徴的な支柱(脚と背板の柱)の彫刻性であり、キュビズムの鋭い木彫りモールディング装飾を有し、ピラミッド形態をなしていた。

[IV-2]. ポーランド・パビリオンのホール執務室の家具。ユゼフ・チャイコフスキーの作品

パビリオンを代表するホール部分の執務室の家具は、ユゼフ・チャイコフスキーによる

設計であった。この作者の室内様式と家具は、1918年から1848年にポーランドで地主や貴族の邸宅で流行したビーダー・マイヤー様式から引用されている⁴⁾。

この様式のインスピレーションは、何よりも扉区分に見られる幾何学的形態の円弧が描かれた図書棚の中に注目される。

図書棚の傍に立つ肘掛椅子や重量感ある事務机は、様々な時代の装飾オーナメントの改造がなされ、アール・デコ様式の折衷主義が見られ、その例として繊細に曲がった肘掛椅子のバロック様式の特徴が示されている。

[IV-3]. 傷病兵・パビリオン。ボイチェフ・ヤストジェンボフスキーの作品から

サロンは、室内様式と家具がキュビズムと素朴さが表現された印象が強い。それぞれの家具の装飾は、鋭い角の張り板・化粧板、つまり突き板の縞を付けられた木目装飾であった。クラクフ工房の伝統からフォーク芸術が目立つ。この家具本体の建築・構造的性は、前述のスタニスワフ・ビスピアンスキ設計のゾフィア・ゼロムスキー夫婦宅の家具と特徴の点で類似する。

サロンの一部は民衆芸術の起源が見られ、典型的な幾何学形態の家具が維持されている。すなわち、椅子やスツール(肘掛や背もたれのない腰掛け)、箱型の長椅子、ソファ、角張った、粗野な、深い肘掛椅子、頑強な構造のテーブル、コンソールテーブルと花台が挙げられる。

シンメトリー形態、控えめな装飾、幾何学化された花型模様のカーペット材料や家具座面の覆い、シンプルな形態のコンソール、動物型陶器オーナメントのカバー、ソファにコブラン織りが掛けてあるのが特徴である。

傷病兵パビリオンの食堂は、食器棚、椅子、肘掛椅子、コンソール、テーブル、そして木

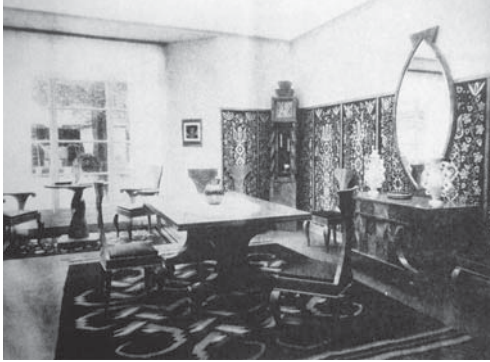


写真-15 傷病兵パビリオンの食堂家具

幾何学的形態の食器棚、椅子、時計台。ボイチェフ・ヤストジェンスキー作。1925年。パリ

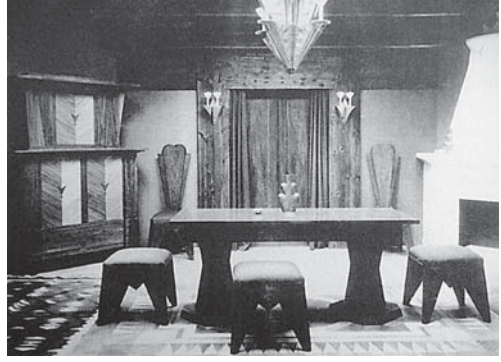


写真-16 傷病兵パビリオンの男性用書斎

チェコキュビズムの影響を受けた幾何学的形態の食器棚、椅子、時計台、ミエチスワフ・コタルビンスキー、1925年。パリ

材による弓形で曲がった幾何学形態の時計台が挙げられる。(写真-15)

また、時計台の長斜形(編菱形)の構成で覆われたはめ込み細工は、フランスのキュビズムの影響を受けた建築家、ル・コルビュジェの家具の影響が見られる。

一方では、食堂における家具が木目化粧板で装飾され、三角形のアル・デコ様式を取っている。上部に半円形形態をもつ食器棚、収納棚をもち波型の小列柱を有する時計台、楕円形の鏡、テーブルが注目される。

彼の家具作品について、フランスのアル・デコ作家のジャック・エミル・リユルマンの家具様式との近似性が指摘される。

[IV-4]. チェコのキュビズムの影響を受けたアル・デコの家具。ミエチスワフ・コタルビンスキーの作品から

ポーランドの傷病兵パビリオンにおける男性用の書斎について論じる。

この書斎セットは、大小のテーブルと食器棚、スツール等で構成され食堂として機能している。(写真-16、参照)

興味のある点として、チェコの芸術家達のキュビズムの家具の初期形態と非常に類似し

ている点である。

それは、チェコの作家による1911年にヴラジスラフ・ホフマンによって、ヨゼフ・マラチカのために設計された家具セットが例として指摘されている。

彼の作品の特徴として、木目の装飾と家具扉枠、天井梁の暗い色彩はキュビズムを暗示し、幾何学的形態の明るい色彩の床と素朴なキュビズムの壁暖炉がコントラスト(対照)に表現されている。これらは、民衆大工から借用され、キュビズムの家具本体の素朴さが強調されている。これらの家具は、逆ピラミッド型の溝をもつ座る脚の形態は、特徴的でそれぞれの家具セットは、狭い重量感のある円錐上部が切り取られたモールディングされた三角形の支持による脚が指摘される。

このようにチェコの初期キュビズムの影響を強く受け、チェコの分析的キュビズムの段階を受けており、鋭い溝・モールディングと深い切り取られた表面がその影響を立証している。

V. ポーランド国内展示会の作品。「LAD」 (ワド) 芸術協同組合会員によるキュビスムと構成主義の作品

[V-1]. ユリウシ・ペトジックの家具作品から

パリの「装飾芸術・工業芸術国際博覧会」で活躍した芸術家達は、1926年に芸術家協同組合を結成し、これまでのフランスを中心としたアール・デコ様式を継承し、ポーランド独自の民族様式の模索からフォーク芸術を基本に新たに産業と生産も含めて融合した創作活動を進めた。1929年のポーランド国内展示会で、キュビスム形態の影響を受けたアール・デコ様式のポーランドを代表する作品を、ユリウシ・ペトジックが展示した。彼の書斎、寝室、食堂の家具設計は、アール・デコ様式の1920年代ポーランドで実現された作品の一つと指摘されている。(写真-17参照) それらは、黒色マホガニーの材料で設計されており、幾何学的形態の家具の構成によるもので、1920年代のキュビスム家具のアイデアを引用したものである。

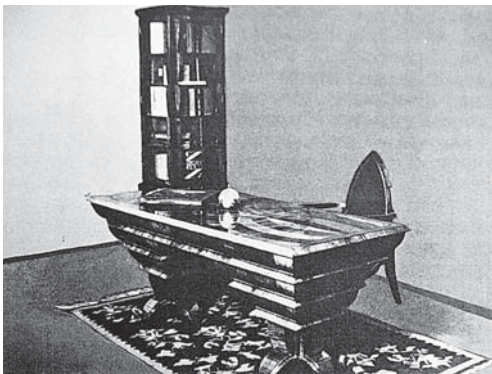


写真-17 キュビスムによる幾何学形態の家具
LAD (ワド) 芸術協同組合員のユリウシ・ペトジック作。クラクフ市の展示パビリオン内の書斎に存在。ポーランド。1929年

また、木目が強調された図の幾何学的形態の表面が際立ち、事務機の脚は階段状に分割され、事務機の引き出しを有するフランスのブレアウ・プラット (Bureau pLat) と類似した形態をもつ。全家具セットは、装飾が円の刻みと「とがりアーチ・尖塔アーチ」である。いずれにしても、このようなアール・デコ様式のキュビスムの強い表現が見られる事例はチェコのキュビスム家具以外には見られない。

VI. 1920・30年代の各室のアールデコ様式

[VI-1]. 食堂—サロン・客間

オーク材の相当な大きなガラス棚が入った食器棚。アール・デコ様式の楕円形と長方形の形態。流線型の線、幾何学化、弓形の繊細に湾曲された脚が特徴を示す。

[VI-2]. 寝室

化粧台は、当時の全ての主婦が好む家具であり、寝室には必ず配置されていた。戦次間の化粧台の二つの基本タイプがアール・デコ様式で生産される義務があった。最初のタイプは、小戸棚付きで大きく長方形、楕円形の鏡を有し、低い小戸棚には引き出しがあった。(写真-18, 作者不明, 参照)

VII. まとめと考察

1918年から1938年におけるチェコとポーランドに見られるアール・デコ様式の幾何学的形態家具の特徴を考察した。そこで、共通点として、それらの形態にチェコのキュビスムの造形的影響を強く受けた事が判明した。

それは、主に初期と中期のアール・デコ様式についての研究によるものである。一方で



写真-18 1920年代のアル・デコ様式の寝室
花のつばみを様式化された化粧台と円形クロ
ゼット。1920年代。ポーランド。作者不明

は、ロシア構成主義、東欧の国際構成主義は、
後に台頭する機能主義等の影響により、装飾
が少ないアル・デコ様式の方向性を与えた。
今後、この様式の継続研究を行いたい。

注：

- 1) 岐阜女子大学紀要。第39号。77頁-85頁。
「東欧ポーランドの校倉造住宅と様式家具」
- 2) 早稲田大学大学院理工学研究科修士課程建
築学専攻、修士論文「フランスの建築家、ル・
コルビュジェの純粋幾何学形態の住居」。
1979年3月
- 3) ワルシャワ工科大学建築学部大学院博士課
程、講師時代の研究に加え、ポーランド科
学アカデミー芸術研究所のプリコフスキー
教授指導及びヴラディスラバ工科大学、ブ
ラハ工科大学等の研究者による助言の下で
行われた研究である。
- 4) ビーダーマイヤー様式は、1815年から
1848年にドイツ、オーストリアで中産階
級に好まれた室内様式であり、ポーランド
に1825年以降に地主や貴族の邸宅の室内
様式と家具様式に普及した。

参考文献，出典資料

- 1) Anna Sieradzka 著，Art Deco w europie i
w Polsce. Volemen. 1996年。1頁-175頁。
Warszawa.
- 2) Joanna Hubner — Wojciechowska 著，
Art Deco Przewodnik dla Kolekcjonerów.
Wydawnictwo Arkady Warszawa. 2008年。1
頁-223頁。Warszawa.
- 3) Joanna Woch 著。Biedermeier Przewodnik
dla Kolekcjonerów. Wydawnictwo Arkady
Warszawa. 2007年。1頁-291頁。Warszawa.
- 4) Anna Kostrzyńska — Miłosz 著。
Polskie Meble 1918-1939. Forma-Funkcja-
Technika. Instytut Sztuki Polski Akademii
Nauk. 2005年。1頁-328頁。Warszawa.
- 5) Andzej. K. Olszewski 著。Dzieje Sztuki Po-
lski 1890-1980. Wydawnictwo Interpress.
1988年。Warszawa. 1頁-187頁。
- 6) Franciszek Stolat 著。Dzieje Sztuki Polskiej.
Wydawnictwo Kluczyński. 1頁-642頁。
Warszawa.
- 7) Sarah Morgan 著。ART DECO. The Euro-
pian Style. Arlington Press. 1990年。30頁。
Warszawa.
- 8) Cillian Naylor 著。National Style and Na-tion
— State. Manchester University. 1992年。29
頁，67頁，68頁，71頁。England.
- 9) Anna Sieradzka. Szlakiem architektury Art
Deco. Stalowa Wola. By the Route of Art
Deco Architecture. Stalowa Wola. Muzeum
Regionalne w Stalowej Woli. 2008年。13, 18,
19, 20, 22, 23, 24, 26, 38, 39, 頁
- 10) Anna Kostrzyńska — Miłosz. Meble Projektu
Mieczysław Kotarbińskiego na Wystawie
Paryska 1925. — źródła Inspiracji. Instytut
sztuki PAN. Biuletyn Historii Sztuki. R. LVIII.
nr. 1-2. 1996年。151頁-153頁。Warszawa.
- 11) Andzej. K. Olszewski. Art Deco. Toward
the Definition and Chronology of the Style.
Polish Art Studies, XIV. 1992年。73-90頁。
Warsawd.

- 12) ペトル・ヴィトリッヒ, ヤナ・ホルネコヴァー, 他, Praha. Ceska ume-ni 1890-1930. Od Secese po Art De-co. Czech Art 1890-1930: From Art Nouveau to Art Deco. 煌めくプラハ, 19世紀からアール・デコへ, 世田谷美術館/読売新聞, 1999年, 20, 106-110頁, 120頁-127頁
- 13) アラステア・ダンカン著, アール・デコ. 関根秀一, 小林紀子, 発田, 洋一訳. 洋版出版株式会社, 平成5年, 7-36頁
- 14) 海野弘著. アール・デコの時代. 中央公論新社, 2005年, 9-62頁
- 15) 鈴木豊, 藤森照信, ロスチスラフ・シュヴァーハ, ペトル・ヴォルフ著. チェコのキャビズム建築とデザイン1911-1925, ホル, ゴチャール, ヤナーク. INAX出版, 1-71頁
- 16) 吉田鋼市著. アール・デコの建築. 合理性と官能の造形. 中公新書, 2005年, 2頁-28頁, 43頁-63頁, 66頁-78頁
- 17) 雑誌. Title. 3. Mar. 2003.(株)文芸春秋発行, 平成15年3月1日号, 17頁-37頁
- 18) 雑誌. 芸術新潮, 1999年11月号. プラハ名物 キュビズム建築. 新潮社, 36頁-51頁
- 19) 谷本尚子著. 国際構成主義世界思想社, 2007年, 39頁-104頁
- 20) デイヴィット・クラウリー著. 管靖子, 他訳. ポーランドの建築・デザイン史. 工芸復興からモダニズムへ, 2006年, 27頁-142頁